

Newsletter

映画英語教育学会 九州支部
The Kyushu Chapter of
the Association for Teaching
English through Movies (ATEM)

第 5 号

2006 (平成 18) 年 9 月 11 日
映画英語教育学会 九州支部事務局 発行

〒803-0835 福岡県北九州市小倉北区井堀 1-3-5
西南女学院大学 人文学部 八尋春海 研究室
TEL/FAX: 093-583-5720
E-mail: kyushu_office@atem.org

編集: 與古光 宏・多賀亜紀・中島千春

Contents

page 1 巻頭言
page 2 第 12 回全国大会ルポ / 映画のトリビア
page 3 第 10 回 STEM 大会ルポ
page 4 映画「ソフィア」 / 第 8 回支部大会案内 / 映画英語 & コミュニケーションフェア 2006 案内
page 5 新会員自己紹介 / 編集後記

九州支部の「三種の人氣」

映画英語教育学会 九州支部
副事務局長 今田 桂子 (福岡国際大学)

この原稿を機会に、いつからこの学会に参加させて頂いているのか、改めて考えてみた。記憶をたどってみると、2001 年の第 3 回九州支部大会からのようだ。きっかけは、多くの方々同様、八尋春海先生のお誘いと、当時、多賀亜紀先生と某大学で出会った事による。多賀先生の発表を拝聴しよう、第 3 回支部大会に出かけたのである。あれから早 5 年かと思うと、時の経つのは...とセンチメンタルに傾くが、それはさておき、ちょうど英語講師の情報交換の場を探していた私にとって、この学会は大変有難いものとなったのである。

ここで、私を感じる九州支部の美点を、三点挙げるとすると、第一に、会員受け入れ姿勢の柔軟さ、第二に、多様な企画力、第三に、会員相互の親密さという点であろうか。よく言われることだが、本当にこの学会は参加しやすい。映画好きであれば、教員でなくても、英語に関係していなくても入会できる。厳格な学会に比べれば、非常にいい加減に見えるかもしれないが、この多様性が、いい具合に作用して、九州支部の活気を作り出していると思う。第二の企画力であるが、これはある意味、ノリの世界である。いったん入会してしまえば、新旧、年齢、序列等に関係なく、意見を述べることができる。新企画などは、懇親会の席などでお酒も入り、話も大きく盛り上がったところで提案されることが多いのだが、それを酒の席の戯言で終わらせず、実現させてしまうところが素晴らしい。単なる思い付きであったものが、話しているうちに、「実現させたいですねえ」「やりましょう」という具合に話が進み、次の会議の議題に上るのである。前回のニュースレターで、秋

好先生が書かれていたように、九州人のお調子者体質によるところも大きいであろうが、何よりも、自由に発言できる雰囲気、また協力を惜しまない仲間が存在も大きいであろう。仲間といえば、第三の会員同士の親しさである。昨年まで、非常勤講師として数校を掛け持ちしていた私は、同じような毎日を過ごしている会員と会い、話をする事によって、どんなに励まされたことか。実際、発表よりもこの人的ネットワークを目当てに参加していると言ったら言い過ぎであろうか。

もちろん、発表を通して刺激をうけたり、実務的なアドバイスをもらったり、いわゆる“学会”らしい活動も盛んである。『国家の品格』で有名な藤原雅彦氏が、エッセイの中で、アメリカの学会を揶揄して、“Publish, or perish.” の世界だと言っていたが (『若き数学者のアメリカ』より)、やはり、学会として存在する限り、少しでも社会に対して研究成果を還元すべきだと思う。その意味でも、九州支部は多くの出版に取り組み、活発な研究発表が行われており、その役割を果たしていると言えるのではないだろうか。

最近、また新たな会員が増えているようである。大変喜ばしい事だと思う。映画と英語という媒体を介して、枠にとらわれず、美点を活かして、この学会がますます発展していく事を願っている。また、10 月には、支部大会と『映画英語 & コミュニケーションフェア 2006』を開催する。今後も、様々な取り組みに参加し、この支部の活動に携わって行きたいと思う。

第12回全国大会ルポ

去る7月1日、横浜市にあるフェリス女学院大学で、第12回ATEM全国大会が開催された。大会テーマは、「映画で発信する英語」。例年通り、姉妹学会のSTEM(映像映画教育学会)からも多くの方が参加され、ATEMの曾根田憲三会長に続き、STEMのLee Ja Won 会長のご挨拶をもって、大会の始まりとなった。

まず、最新企業研究発表として、株式会社内田洋行から、「映画DVDを使った語学学習システム『DVD Role Play』のご紹介 映画スターになりきって楽しく語学学習」というテーマで発表があった。「DVD Role Play」という新しいソフトの紹介が中心なのだが、これが映画のワンシーンを使ってアフレコできるという優れもの。学習者は登場人物になりきり、アフレコしてそれを聞くことができたり、聞き取りながらセリフを打ち込んだり、様々な使い方を映画『ハリー・ポッター』を使って実演してくださった。

続いて、エディンバラ大学特任教授の、國弘正雄先生の基調講演があった。國弘先生は、NHK教育テレビ講師を経て、東京国際大学教授を務められ、この間、同時通訳の第一人者として、様々な外交交渉の重要舞台で活躍なさった方である。そのご経験を基に、英語学習に何が重要かということをお話いただいた。英語学習に関する著書が多いので、今回のこの講演をお聞き逃しの方は、ぜひご一読いただきたい。

午後の研究発表も盛況で、15の発表があった。筆者が出席させていただいた教室では、CALLシステムの効果を改めて感じるような発表と、最新機器が使えなくても、いかに学習意欲を高めることが可能かを実践していた発表に、大きく分けられたように思う。前者の中では、音声教材・映像教材が作成できるフリーソフト“audacity”と、CALLを組み合わせた学習教材についての発表に心惹かれた。意外と簡単に利用できそうで、早速明日使ってみよう!と思った(...ものの未だ手付かずで今日に至っている)。最新機器を導入した授業方法と、そうでない方法と、どちらもあるほどと思わせてくれる発表であったが、後者の場合、教員の個性と学習者への働きかけによる所が、より大きくなることを、発表されていた先生方のとても楽しい実演、あるいは授業風景の録画を拝見して、ひしひしと感じた。がんばらねば!

最後に、STEMのKiwon Sung先生の発表があった。具体例を示しつつ、語学学習ばかりでなく、英語圏の文化を知る上でいかに映画が有効かということ、韓国の大学生の反応を示して発表なさっていた。同じアジア人として共感する所が多く、映画の持つ力を改めて感じた。

来年度の全国大会は、琉球大学の予定。九州支部の皆さん、乞うご期待!!

(文責：秋好礼子)

映画のトリビア vol.05 ～クリント・イーストウッドのキャリア～

先日、小林信彦のエッセイ『本は寝ころんで』(文春文庫)を何となく読み返していたら、イアン・ジョンストンによるイーストウッドの評伝が取り上げられていた。それによると、イーストウッドは少年時代から音楽的才能に恵まれていて、ピアノとトランペットが上手かったそうだ。それで、以前『ミリオンダラー・ベイビー』(2004)を観て感じたちょっとした疑問が解消された。映画の最後のクレジットで、音楽担当がイーストウッド自身になっていたのだから、「おや」と思ったことがあったのだ。

私がイーストウッドを初めて知ったのは、『ダーティ・ハリー』(1971)だった。西部劇のスターだったことは後で知ることになるが、テレビで放映された『恐怖のメロディ』(1971)(イーストウッドの初監督作品。ストーカーのような女にラジオのDJが執拗に追われるという怖い映画)を観た時は、ハリー・キャラハンとも西部劇のスターとも結びつかず、「こんな暗い映画を撮っていたのか」と驚いた記憶がある。イーストウッドは、西部劇や冒険小説、ミステリー小説が原作の映画から、『マディソン郡の橋』(1995)といったメロドラマまで、監督、出演し、時には自ら製作まで兼ねながら、着実に自分の映画を世に送り出してきた。さらに、イーストウッドはアメリカのどこか小さい市の市長も以前務めていたはずで、多才というか、タフというか。

しかし、テレビ・シリーズで人気を得て、『荒野の用心棒』(1964)のような「マカロニ・ウェスタン」(イタリアで作られた西部劇。本当は「スパゲティ・ウェスタン」)と『ダーティ・ハリー』でスターの座を確立したイーストウッドを、アメリカの批評家は監督として評価しながらなかったらしい。もっとも、『許されざる者』(1992)を皮切りに、最近では、『ミスティック・リバー』(2003)、『ミリオンダラー・ベイビー』でも数々の賞を取って、すっかり監督として大メジャーになってしまったが。

イーストウッドの最新作は、硫黄島の戦いを映画化したものだ。最近の傾向(邦画洋画問わず、コミックの映画化、続編もの、昔の映画のリメイク等)に食傷気味の私には、この新作の公開がひたすら待ち遠しい。(砂川典子)

第10回STEM全国大会レポート

去る4月22日に、本学会の姉妹学会である韓国のSTEM(映像映画教育学会)の全国大会に参加しました。今回は、沖縄からの参加者もあり、九州支部からは10名が参加しました。去年は、ゴールデンウィーク中の開催ということで、チケットが割高だったりなど、色々大変だったのですが、今回からはLee会長の計らいで、開催時期をずらしていただくことになりました。

今回の大会は、ソウルの繁華街からさほど遠くはない漢城(ハンソン)大学校で行われました。仁川(インチョン)空港に着いてからは、シャトルバスで移動です。また、今回は、大学のゲストハウスではなく、近郊のホテル(しかも五つ星!)に宿泊することになっていたため、初日は専ら観光です。昼食のあと、大統領官邸を車中から見学し、韓国の有名なデートスポットでもある「ソウルタワー」にも昇り、ソウル市内が一望できました。その後、夜の歓迎会までは「南大門市場」でお買い物です(私にとって、ここに来ることは今回の一つの楽しみだったのです!)。込み入った路地に、色々なお店がひしめき合っていて、日本とは違う雰囲気を満喫できました。

今年の大会では、ATEMから関西支部のTodd Thorpe先生が発表されました。学生が作成した、京都の紹介ビデオなどを用いたご発表で、非常に興味深いものでした。懇親会の2次会では、カラオケに行くのがお決まりなのですが、学生の頃を思い出すかのような盛り上がりです。最終日には、世界の文化遺産である昌徳宮(チャンドックン)を訪れ、韓国の歴史にも触れることができました。

さて、私にとって今回の訪韓は3度目ですが、滞在中は常にVIP扱いで、STEMの皆さんが私たちをもてなしてくれます。毎回歓迎ムードいっぱい、反日デモがある国だとはとても思えません。こうして、少しでも国際交流ができることは学会での研究だけではなく、様々な意味で有意義なことだと感じています。ぜひ、多くの方に参加していただき、韓国の素晴らしさに触れてほしいと思います。

(文責：鶴田 知嘉香)



ソウルタワーの前で全員集合!



世界の文化遺産である昌徳宮(チャンドックン)にて

映画ショッキング vol. 05

～映画と絵画～

「真珠の耳飾の少女」という絵画を観たことは？不思議な魅力に溢れたこの絵は世界中の絵画ファンのみならず多くの人々の心を虜にし、ついには映画にまでなってしまった。ほぼ黄色と青色だけで造り上げられた人物像は、黒一色をバックにした画面構成により、浮き出たような印象を与え、去年の夏ハーグ(オランダ)のマウリッツハウス美術館でオリジナルを観た私の記憶に強烈なイメージを刻み込んだ。映画は絵画と同名の小説を原作としており、絵のモデルとなった少女を画家フェルメールの家で仕えていたサーバントとして登場させ、画家と少女との恋物語的な要素を絡めて仕上げている。

なんといっても映像が極めて美しい。どの場面もフェルメールの名画を観ているような、静寂に包まれた厳かな雰囲気満ちている。私はフェルメールの絵で「静謐」という言葉の意味を教えられたような気がする。登場人物の無駄のない所作、静かなたたずまい、台詞を最小限に抑えた物語の展開、そのどれもが見事に調和し、画家のアトリエで光と影が織り成す陰影はそこで繰り広げられる人間模様と奥行きを与えている。各場面のあまりの美しさに圧倒され、いつしか映画を観ていることを忘れ、美術館でストーリー性のある一連の名画を鑑賞しているような気さえしてくる。一枚の絵画から始まった映画は、映画本来の特質である音と動きを極力省くことによって、限りなく絵画的な世界へと我々を導くことに成功している。映画における絵画的要素を追求すると、映画の要ともいえる言葉と動きですら不必要だと思える世界に辿り着くのだろうか。映画は3Dに近いヴァーチャルな世界を提供してくれるが、2Dである絵画が喚起する想像力の世界は、3Dに勝るとも劣らない強烈な要素を内包しているのではないか。人間の想像力が危機的状況にある現代、このような映画は様々な問題を我々に投げかけてくる。実に不思議な映画である。ちなみに、この名画の現在の住居である美術館は王宮の一角にあり、池を挟んで対岸から見る美術館もまた絵のような美しさを湛えている。

次のこのコーナーは、熊抱さんをお願いいたします。

(時枝千富美)

九州支部新会員 自己紹介 (五十音順、敬称略)

・篠田 幸治 (徳之島農業高等学校)

SCREENPLAY Oral Communication I との出会いが、入会のきっかけです。“Back to the future” のマーティのセリフ “If you put your mind to it, you can accomplish anything!” に感動し、生徒達に暗記させています。

・田上 優子 (福岡女子大学)

初めて見た「小さな恋のメロディ」で、英語と異文化にときめいて以来、今でもスクリーンに「王子様」を探し続けています。目下の研究テーマは「学習の動機づけとストラテジー」ですが、心のこもった言葉を伝え・学ぶ必要性を痛感する今日この頃です。

👉 今号の「映画ショッキング」に登場する絵画、フェルメール『真珠の耳飾の少女』です。『青いターバンの少女』とも呼ばれているそうです。(文責:多賀)



第8回九州支部大会案内

第8回九州支部大会が開催されます。今年は、8つの発表を予定しています。研究発表から新しい知見を得るのはもちろんのこと、授業でのアイデア交換、日頃の悩み相談など、会員同士の交流を深める場としましょう。当日は、映画オタクコンテストも予定されています。こちら也大いに盛り上がりましょう！

日時：10月7日(土) 12時30分より受付開始
場所：西南学院大学 1号館2階
福岡市早良区西新 6-2-92
(地下鉄西新駅から徒歩約5分)
諸連絡：八尋春海
(西南学院大学 TEL: 093-583-5720)

「映画英語 & コミュニケーションフェア2006」案内

あのフェスティバルが、多彩な講師陣と共に、再び福岡にやってきます！今回は、イギリス貴族社会の裏事情(イネス多恵子講師)、オックスフォードのスローライフ(中谷安男先生)など、異文化に関する興味深いお話が盛りだくさんです。加えて、英語面接の受け方(エレンベルグ講師)、観光業についてのお話(陣内幸子講師)、企業からお招きした講師の先生方による就職に関する情報は、学生の皆さんに間違いなく喜んでもらえることでしょう。また、高瀬先生の著作権問題に関するお話、鶴田先生の映画DVDを使った授業方法も聞き逃せませんね。

上映会も開催されますので、ご家族、ご友人、ご近所の方々をお誘い合わせの上ご来場下さい。ご勤務校での宣伝もよろしく願いいたします。
(詳しくは同封のプログラムをご覧ください)

日時：10月8日(日) 10:00 開場
場所：西南学院大学 1号館2階
上映映画：『ディック&ジェーン』(2006年、米)
コメディの帝王、ジム・キャリーが、持ち前のコメディセンスを存分に発揮した、ブラックユーモアたっぷりの復讐劇。

懇親会

日時：10月8日(日) 5:30より(予定)
場所：じゃがいも式番館
(西南学院大学 正門斜め前)
福岡市早良区西新 3-12-7
Tel: 092- 822-6222
会費：3,000円

(文責：中島 千春)

編集後記

前号に引き続き、今号の編集後記も與古光が担当いたしますが、これには理由がございます。九州支部の、現体制におけるニューズレター編集長として、最後のご挨拶とお礼を述べるためです。

私事で恐縮ですが、思い起こせば2004年3月6日。前任校での任期満了を目前に控えていた私は、当時住んでいた長崎県佐世保市から帰省し、天神で開催されました運営委員会、ならびに、その後の懇親会へ参りました。外は、3月にしては寒かったのを覚えています。この時、ニューズレター編集長に立候補し、それから5ヶ月後の運営委員会で、創刊号の9月発行が決まりました。

以来、本当に多くの皆さんのお力添えを頂きまして、今回の第5号まで無事に発行することが出来ました。これまでに、記事を執筆して下さいました先生方一人一人に、この場をお借りして、心よりお礼を申し上げます。

そして、個人的にお礼を申し上げたいのが、副編集長の多賀さん・中島さんです。まず、毎回の運営委員会終了後、いつも先陣を切って、最新号の編集作業の叩き台を整備して下さいました多賀さん。そのお仕事の速さには、いつも脱帽しております。

また、メールが主体の、細やかな神経を使う作業にあって、中島さんからのメールには、用件のみならず、いつも温かい一言が添えられていて、私たちは2人とも癒されておりました。教え子の学生にお願いして、素敵なイラストを描いてもらったのも、中島さんの広い人脈のおかげでした。

完全な朝方人間故に、夜に弱い私なぞ、すぐに睡魔に負けそうになりますが、そこで踏ん張り切れたのは、副編集長のお2人からの、迅速なご連絡と、温かみのある激励の賜物だと思っています。本当に、楽しくお仕事をさせて頂きました。心より感謝申し上げます。

来年1月から発足する新体制では、多賀さんに編集長の役職をパトタッチします。また、私も、今度は副編集長として、引き続き編集に携わって参ります。そして、次回からは、新たに浦田毅彦さんに副編集長に加わって頂く予定です。次号からのニューズレターも、どうぞご期待下さい。

(文責：與古光 宏)